

『カミュ=シャル往復書簡集』

古野, 千恵

<https://doi.org/10.15017/9226>

出版情報 : Stella. 26, pp.183-186, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『カミュ＝シャル往復書簡集』

古野千恵

ルネ・シャルの生誕百年にあたる本年、フランスの書店には研究書やカタログをはじめ多くの関連書籍が並んだ。本書もそのひとつであり、1946年3月から59年12月までの13年間にわたるカミュとの往復書簡184通——うち71通がカミュ書簡、113通がシャル書簡——を収める。資料体の大半がフランスのメディア企業ラガデル・グループの事務総長ピエール・ルロワ旧蔵の書簡であり、その編纂・校訂には昨年出来（全4巻予定の内2巻）の新プレイアッド版『カミュ全集』の編集にも参加したフランク・プラネールがあたっている¹⁾。カミュの書簡集としては、これまでジャン・グルニエ、パスカル・ピアとの往復書簡集の2冊を数えるのみであっただけに²⁾、まさに待望の一書といえよう。

カミュはシャルを、ランボーやアポリネール以来の大詩人として、さらに彼自身の意図する「反抗」を身を以って生きた「反抗の詩人」として称えていた。彼にとってシャルは詩人そのもの、詩そのものだったのである。兄弟のごときふたりの友愛関係はよく知られるところだが、彼らが出会う以前、感嘆はカミュの側からの一方的なものでしかなかった。シャルは『異邦人』や『ペスト』に目は通してはいたが、ヴァレリーと同様、小説というジャンルがどうにも好きになれなかったのである³⁾。そのようなふたりが初めて出会ったのは1946年。ガリマール社の「希望」叢書を監修したカミュがシャルの『イプノスの手帖』を手がけたことが契機となった。このときカミュは33歳、いっぽうのシャルは39歳。パリでの生活を拒み、リル＝シュール＝ラ＝ソルグ訛りの抜けないシャルは、あきらかに異色の存在であり、それがパリに馴染めないカミュの警戒心を解いた。ふたりには戦争とレジスタンスという共通の背景があり、そこから相互の敬意が生まれ、やがては深い友情へと発展してゆく。作家と詩人は、それぞれサッカーとラグビーを愛し、女性を愛し、何よりも南の

陽光を愛した。カミュにとってシャルルは「自分を圧倒し、手なづけ魅惑する兄」のようであったし、シャルルのほうは「カミュの奔放な陽気さ、あるいは熟慮の末の陽気さ」が気に入り、彼と出会うや否や「共に道を歩むことになる」と悟ったのである⁴⁾。

本書は、ふたりが出会った年からカミュが亡くなる前年までの書簡を収めているが、1947年までの書簡においては、当時のカミュがパリの生活に疲れ、南仏に家を購入しようとしていたことなどが話題の中心となっている。また50年代前半で注目すべきは、まず共同編集していた雑誌『エンペドクレス』の方針について記した書簡や、『反抗的人間』にかんするやり取りだろう。そして54年ごろから59年にかけては、カミュが自身と家族を襲った身体的・精神的危機について告白している書簡に注目したい。これら200通ほどの書簡は、第2次大戦後のふたりの社会参加や共同作業についてはもちろんのこと、互いの作品や文学的成功をつうじて深まった絆をも明らかにする。彼らは互いの活動に心から関心を寄せ、そこから触発されたことを己の作品へとつなげた。進行中の仕事にかんじ情報交換を絶やさず、また作品が完成すると直ちに原稿を送り著書を献呈しあったが、その行為は単に相互的称賛にとどまることはなかった。そこには思いやり、とりわけ困難な局面を支える情愛が存在し、それによって両者の絆は強固なものとなる。彼らの思いやりは慎み深く模範的で、どちらかが困難な状況にあっても、相手の迷惑にならぬよう、また互いの背負う日常を重苦しくさせぬよう気遣い^{いたわ}り^わりあった。そのいっぽう彼らは時として慎みを捨て長々と心中を打ち明けあってもいる。

書簡からは作家と詩人の肖像、わけても再々にわたりカミュを守ろうとするシャルルの姿が立ち現れてくる。カミュが病をえたとき、また辛辣な批判・攻撃を受けたとき、シャルルはその苦悩の一番の理解者となる。ここでは、そのようなふたりの関係を端的に伝える書簡、すなわちカミュが『反抗的人間』をめぐるサルトルと論争を繰り広げたときの書簡2通を紹介しよう⁵⁾。周知のとおり論争は1952年5月、フランシス・ジャンソンが『現代』誌に発表した批判が発端であるが、これに答えるかたちでサルトルに宛てた手紙が同誌8月号に掲載されるやいなや、シャルルはいち早くカミュへの支持を伝える(同年8月の書簡)――

親愛なるアルベール、

我々はやっと分かったというわけです！ 案の定、予期していたとおりに！ もはやサルトルは、浴槽で暗殺されたマラのごとく、歴史のなかに埋没した死せる存在だということが……

『現代』誌に宛てた貴兄の手紙は、あの滑稽な連中の怒りに火をつけてしまいました。（形而上学的な言い方をすれば）張り紙〔仰々しい記事〕を信じた人々の目には、我々がまるでわずかな身銭をすいあげ、騙しあい盗みあっているように見えたかも知れません。だが断じてそうではない。我々がなさんとしているのは気高く清廉な（率直きわまりない）「告白」なのです。

心優しきキリストよ、貴兄の輪郭をはっきりと姿を現しています。

親愛なるアルベール、まったく貴兄のおっしゃるとおり！ …… 彼らが目論んでいる1952年の雪崩なるもの、それはまさに「犯罪」なのです。

貴兄を待っています。愛情をこめて。

ルネ・シャル

たいして、苦悩を打ち明けるカミュの書簡は友を慕う気持ちにあふれる（同月15日付）——

親愛なるルネ、

当地の意地悪な人々の気性と諦観を受け入れようとして早2週間になります——もちろん、うまくは行きませんが。することといえばただ散歩か、そこそこの釣果の鱒釣りのみ。ここの出来事といえば雷雨。仕事にかんしてはまったく進展なし。ときおり貴兄宛ての手紙を少しばかり綴ってはいますが、ほとんど進みません。だがそれによって貴兄のもとを去らずにいられます。本当のところは、数カ月来私が無為をかこっている陥穽、とりわけこの数週間パリで喘いでいた陥穽から私はまだ抜け出せていないのです。

私には革新——理屈の上ではすでに自分とは縁が切れているあらゆるものから、真の意味で自分を切り離す何か重大な決意——が必要です。さもなくば私は老け込んでしまいます。

…… 親愛なるルネ、貴兄がいなくて寂しい、本当に寂しい思いをしています。一言いただければ嬉しいのですが。愛情をこめ貴兄のことを思っています。

アルベール・カミュ

*

本書簡集はシャルがカミュに面会を求める短い手紙から始まっているが、ふたりのやりとりは当初から十年來の親友のそのような印象を与える。そし

て友情が深まりゆくほどに、シャルは心からカミュを思い、幸せを祈る献身的な友となった。シャルがある日突然カミュが消え去りそうな感覚に襲われ、友を追いかけ何とかつなぎとめようとする姿には、痛み苦しみに似たものさえ読みとれる⁶⁾。彼はカミュが逝く2日前、ルールマランにある友の家を訪ねているが、そのさいカミュは共作『太陽の末裔』を「何かあろうとも残してほしい」と友に託したという⁷⁾。彼らは常に同じ方向を見定めていたからこそ、その関係は終生変わることがなかったのだ。本書簡集は、カミュの文学活動を知るうえでのみならず、シャルとの関係がいかに築きあげられたかを知るうえで第一級の資料である。これに続いて両作家の足跡を追う手がかりとなる関連書簡が発掘され世に出ることが切に望まれる。

註

- 1) *Correspondance Albert CAMUS – René CHAR 1946–1959*. Édition établie, présentée et annotée par Franck PLANEILLE, Paris : Gallimard, 2007, 263 pp.
- 2) *Correspondance Albert CAMUS – Jean GRENER 1932–1960*. Avertissement et notes par Marguerite DOBRENN, Paris : Gallimard, 1981, 280 pp. *Correspondance Albert CAMUS – Pascal PIA 1939–1947*. Présentée et annotée par Yves-Marc AJCHENBAUM, Paris : Fayard / Gallimard, 2000, 154 pp.
- 3) Olivier TODD, *Albert Camus, une vie*, Paris : Gallimard, 1996, p. 484.
- 4) *Ibid.*, pp. 485 et 487.
- 5) *Correspondance*, op. cit., pp. 97–99, lettres n^{os} 75–76. なお書簡集校訂者によれば、「シャルはおそらくは『現代』誌5月号掲載のジャンソンの論文にたいするカミュの返事の発表翌日、彼に手紙を書いた」(p. 97)。
- 6) 「いったい君はどこにいるんだい、アルベール？ なぜか君を失うような残酷な感覚に襲われたんだ」(*ibid.*, p. 162, lettre n^o 140)。
- 7) Voir *ibid.*, p. 226.